

東亞香料史

山田憲太郎著

山田憲太郎氏は篤學の士である。長崎高等商業學校在學中、故武藤長藏博士に師事して東西交涉史に關する興味を深くし、神戸商科大學卒業後、大阪小川香料店に於いて香料事業の經營に携はる職務の傍ら、その専門智識を基として香料史の研究に志し、獨力東西の典籍を蒐集し、孜々として倦まざるその成果は、逐次「小川香料時報」の紙面を飾つたものであるが、この雜誌頒布の範圍は餘り廣からざるが爲に、従來の史學關係論文索引にも氏の名を逸してゐたやうである。先頃新たに「東亞香料史」を公にして、この未開發の分野に一の貴重な文獻を加へられたことは、南方研究の重要さを痛感する折柄、誠に時を得たるものと云ふ可きである。

この書の内容は五部に分れ、「序説」に於いて香料の種類、性質及び香料史の概要を説き、史上に於ける香料の重要性を指摘する。「東西交涉史上に於ける肉桂の源流」は、調味用香料の代表として、肉桂を取扱ひ、支那肉桂 Cassia と錫蘭肉桂 Cinnamon の二種が現今著名なるが、そは何時頃より支那及び西洋に於いて使用せられたかの問題につき、前人諸家の所説を批判しつゝ、考證し、南支の肉桂は前漢代より中原に知られ、西洋にては古く埃及希臘人が肉桂を用ひし記録あるが、そは南印度沿岸の肉桂なる可く、錫蘭肉桂は西紀十三世紀より漸く著はれしと論ずる。

次の焚香 Incense を對象とする二篇「薰陸香即ちアラビア乳香を中心とする樹脂香料の支那傳來」と、「東亞沈香志」が本書の核心をなす。著者によれば原來東洋と西洋とは、焚香の體態を異にし、西方にては香の重點は樹脂香、就中乳香に置かれるが、東亞に於いては香の中心は香木、就中沈香である。先づ支那に於ける乳香の使用は西方より傳へたものであるが、著者はその傳來に就いて、或は安息香の意義を考へ、薰陸香の語源を論じ、宋代特に乳香の消費が盛大なりしを述べ、次に沈香に就いては支那に於けるその流行は必ずしも全々佛教に負ふものに非ざるを指摘し、南北朝・隋・唐を経て、焚香の主流となりし經路より、我國に於ける香道の發達に説き及び、特にその玩賞に於いて、香を直接火に投ぜず、銀板を隔て、香氣を發せしむる隔火の法は我國の發明に係るものに非ずやと推定された。(最後の點は論考ふ可きか)

最終の「ジャスミンの南支傳來」は、それ自身が自然に發散する香氣を其儘に利用する、芳香物 perfume の代表として、ジャスミンを取扱ひ、西方世界より支那に輸入せられて南支の特産として栽培さるゝに至りし年代を論じ、南方草木狀の記載に對し疑問を残して、確實なる資料としては唐代以前に溯らざるを結論としてゐる。

思ふに香料が東西交涉史上に占むる位置は極めて重要であり、西歐人は早く此點に注目して、夥多の基本的な業績を残してゐるが、東亞に於ける香料史の研究は邦人に二三の論及あるを除き殆ど考慮の外に置かれて來た感がある。蓋し香料の性質として、種

類の多く、用途の複雑なる、其の研究には文獻の讀解批判に多大の困難を伴ひ、或點に至つては是非共、専門なる博物學的及び商品學的の智識と、之より生ずる第六感とが必要となつて來る。これ香料史學の必要を感ぜられ乍ら遂に放置されたる主なる理由であらう。吾人は今やこの好題目に對して、この好著者を得たるを喜ぶものである。(國六判、本文三九六頁、圖版十一、東洋堂發行、定價參圓五拾錢)(富崎市定)

北宋全盛期の歴史

岡崎文夫校閱並導言吉田清治著

本書は昨年秋に出版されたもので今頃紹介するのは聊か時期を失した感がないでもない。それに宋代の歴史の専門家でも何でもない私がこれを批評するといふことも餘り當を得た話ではないかも知れぬ。にも拘らず事改めて本書を私ごとり上げようとするのはこの本が「歴史」と銘打つてあるからなのだ。

我東洋史學界では所謂「研究」は厭程あるが「歴史」が書かれることは極めて少い。概説や講座の類はあつても堂々たる歴史は少い殊に支那の周圍の民族や國家の歴史でなく支那そのもの、歴史となると一層鮮い。歴史が書かれないから従つて顯著な史觀に接することも殆んどないといつていい。少し誇張して言ふならば一體史觀らしい史觀があるのかどうかさへも怪しい様な状態である。かかる現状の中にあつて本書はとに角一家の史觀を持ち、一つの歴

史として世に問ふた珍しい著述であるといへる。

唯一寸残念なのは取り扱はれた時代が餘りに短いのと、も一つは著者がどこまで吉田氏であるかどこまで岡崎博士なのか判然しない點である。併し固よりこんな事は大した問題ではなく、岡崎清治といふ人が書いたのだと思つて置けばすむことだ。それよりもつと問題になるのは何故北宋全盛期が取り上げられたかといふことだが、この點に就いては別に説明がないから、特に重大な意義があるわけがなく何かの都合で北宋が擧げられたのだと解して置くより仕方なからう。

卷頭に岡崎博士の導言があり、十八頁に亘つて遠く漢より説き起し唐五代より宋にかけての大勢を簡明に述べ盡されてゐる。これによつて本文の北宋時代に至る迄の前後の脈絡は眞に遺憾なく會通してゐるといへる。後に續く時代に就いては、本文中に多少觸れてはあるが今少しく力を入れてあつたならば文字通り首尾一貫した立派なものになつただらうと思はれぬでもない。

さて本書は「歴史」と題されて居り著者もその積りで筆を進められた様に看取される。それならば如何なるものを歴史だと考へて書かれたかといふ事になると多少はつきりしない。といふよりはそんなはつきりした觀念を持たずに叙述を進めて行かうといふのが著者の眞意かも知れぬ。けれども苟くもその史觀に興味を惹かれて本書を讀み出した者としては無理にでもそれを抽出しなければならぬ。

端的に言へば著者が本書に於て歴史と考へられたものは私に言